



◇なかむら・けんじ

1962年生まれ。熊本大学大学院（日本画）を卒業。京都・奈良に携わって文化財保存に携わり、東大影御主、各地で個展を開催。熊本市東区在住。

午後十時頃になると「そろそろ寝ようかな」と言っている。先生は二階の寝室に向かう。数年前に脳梗塞で半身不随となったがりハビリにより動けるようになったものの更に胃癌を患い手術で胃の半分を摘出。七十七歳という高齢でもあるし、基本的な体力はかなり奪われていた。夜は軽く晩酌をさしていた。足元が不安なので寝室まで奥様が付き添う。私は居間の片づけを済ませてから三畳ほどの自室に入る。それから一〜二時間描く。部屋は一階のリビングの隣。家のほぼ真ん中あたりに位置する。

深夜の缶ビール

自室に入ってからすぐに描き始めることが多かったが、しばらくするとコトコトと二階から物音が聞こえて、その後一階のリビングに人の気配がする。顔を出してみると先生がいる。カウンターのポケットが膨らんでいる。小さめの缶ビールである。ニコッと笑って「中村くんも飲んでええぞ」と言いながら二階へ向かわれるので、寝室まで付き添う。以前は

大変な酒豪で一晩中飲み明かすこともあったと聞く。医者からあまり飲まないように言われているため控えているけどやっぱり飲みた

都に向かい、西山先生に師事を仰いだ。当初、全く考えていなかったのだが先生の自宅に住み込みで勉強することになった。内弟子である。私の知る限りでは日本画で内弟子は私が最後ではないだろうか。昔は当然

内弟子暮らし9カ月

開けて先生に渡すとまたニコッと笑っておやすみと言って部屋に入られる。一晩に二度降りて来られたことはない。必ず一回だけ。時々私は先生我慢してるんだろかなと思いつつまた少し描く。

のことであったが私が大学院を修了した一九八八年には既にそのような形での学びの場は無くなっていた。朝は庭の落ち葉を箒で掃いて、チャコ（チャウチャウ犬）の世話をすることから始まった。朝食を済ませて先生の画室に向かい筆洗に水を入れてから膠を溶く。そうこうしていると先生が起きてきて画室に入ってくる。午前十時頃である。画室は二階の寝室の隣であっ

た。私も大学院まで日本画を専攻してはいたが本物の作家となると全てにおいて経験も意識レベルも全く違い、膠の濃度も好みがあるしそのこだわりは当然ながら半端ではない。季節や気温で調整もしなければならぬが時折ちょっと膠の状態が良くないと先生は怖い顔になっていた。

徹底した現場主義

先生は画室に入ってから夕方五時頃まで描きっぱなし。驚異的である。何処にそのようなエネルギーがあるのか全く理解できない。体も不自由であり、高齢であるにも関わらず描き続ける。自分が先生の年齢や状態だったとして、どう考え

てもこれだけ描くことが出来ると思えなかった。毎日だから尚更であった。結局、日本画家であるとか立場とか諸々のことなどではなく、ひたすら描くことが好きで描かずにおられないという衝動に他ならないと思った。しかもその衝動がいくつになっても失われな

また、先生は山岳風景の日本画家であった。海外にも取材に出られるが国内では圧倒的に阿蘇と桜島を描いている。阿蘇は数十回先生に訪れている。私が西山先生に学びたいと思った大きな切っ掛けでもある。大量に阿蘇の写生があるにも関わらず新たに描く時にはまた阿蘇へ行く。先生が言うには「前は前、今は今、全然違う」。膨大な量の写生を前に「徹底した現場主義でしか真実は描けない」と言う。

私が西山先生の門戸を叩いて九カ月後、先生は他界された。短かったと思う。しかしこれほどの作家の姿を一瞬でも間近で見て感じた濃密な体験は私が今も尚描く力になっている。

三人の先生との出会い

高校三年生の時、進路が決まらずにいた自分に美術を担当されていた小林孝夫先生が「絵が描けるのだから、一度しっかり美術を勉強してみたらどうか」とお声を掛けて下さって「絵を描くことが好きな自分」を改めて認識し、美術系の大学へ進学する目標が出来ました。

それから、デッサンを学ぶため美術研究所に通ってみたりもしましたが、雨森三郎先生の教室に通って初めてデッサンにおいて大事なことを教わりました。今でも形を取るときは先生を思い出します。

小さな頃から植物、動物、昆虫など生き物が好きな自分には生きるものを写し描く日本画が合っているように思われ、大学では日本画コースへ入学しました。知識、経験共に0から「日本画」を教えて下さったのが中村賢次先生です。好きなことを、を最大限に活かせる生き方を教わりました。自分を振り返ってみて、先生方の存在の大きさは感謝してもしきれない思いです。

こ 歌子
わ 和歌子

(熊本市西区)

とう 藤

さ 佐

〈日本画〉 崇城大学芸術学部准教授、日展会員